

異文化との出会い—留学・留学生—

佐 中 忠 司

(広島大学学校教育学部・教授)

留学とは、異文化との出会いであるといってもよいであろうか。自ら海外に出向いた異文化との直接的な接触、あるいは海外からの若い青年を迎えての別の形態での接触。それぞれに趣を異にするとはいえ、また多くの共通する点があるように思われる。こうした観点から、与えられたこの機会に、私自身のささやかな体験を通して感じたり考えたりしたこと的一端を披瀝してみようと思う。留学や留学生との交流のなかで体験した驚きや気付きをさまざまに想起することで国際的交流促進の一助にでもつながれば幸いである。

A. 異文化との出会い—海外での体験から

ささやかながら海外における異文化との直接的接触の経験がわたしにもある。国際財政学会や国際公共経済学会他の研究者組織の大会などに出席したり、先方の政府からの招待によるものであったり、個人やグループでの研究調査や資料の収集などが、その主なケースである。これまでに訪問しえた国々は、およそ20か国くらいであるが、だいたいヨーロッパの国々とくにイギリス、そこを起点とした周辺の国々や地域が中心である。時間的にも精神的にももっとも強いインパクトを受けているイギリスでの体験を中心に、断片的な思い出に過ぎないが綴ってみたい(研究内容については末尾にその一端を掲載)。

シェフィールド大学に家族ともどもしばらくお世話になったことがある。スティーブソン・ホールという立派な寮にも一月余りとめてもらった。それぞれ個室になっていて、立派な食堂や図書館、娯楽室などもあり、学生や職員がいつでも宿泊できるようになっている。すぐ近くには、ワードン(学寮長)を兼ねる教授の立派な邸宅もあり、その屋敷の一角にもしばらく逗留させてもいただいたこともある。寮の大広間を兼ねた食堂には、ときには舞台ともなるハイ・テーブルがあり、そこには、外国や国内各地からも訪ねてくる大学関係者が陣取って食事をする。一般の学生は、フロアーに並べられているテーブルにつく。別室のシニア・ホールにスーツ・ネクタイ姿で関係者勢揃いし、学期中は毎日ホストの先導でこのハイテーブルに着席する。アルコール類は、希望のものは個別に食前か食後にシニア・ホールでとり、ノートに記帳しておいて後で清算する。ハイ・テーブルのみは、ウェイトレスが料理をはこんでくる。このテーブルの横にオープンが据え付けてあり、その中に各種の皿が暖められている。この皿の暖かいのがごちそうのひとつである。食事には時間をかける。とにかくウェイトレスが次の料理を順番に運んでくるまでは、たべようにも食べられないのであるから。日本のように、一度にいくつもの料理が出されて

好きなものから食べるという習慣があまりないように感じられた。ゆっくりした食事の間は、実によく話がはずむ。初対面のときなどは、自己紹介だけでも何とかなるが、そのうち話題もしだいに乏しくなり、現地訛りのホストの早口の会話にもなかなかこちらの会話力がついていけず、手持ち無沙汰になつてしまうこともあった。

イギリスは全体的には、治安の良い安全な国柄であるといわれている。だが、それも程度問題である。この寮でも、戸締まりは実に厳重であった。入り口の管理人の頑強なおじさんの陣取って居る小部屋でも、つかの間の席空きの間もかならず施錠されていたし、宿泊棟の入り口、中に入ってから各セクションそして各人の部屋にいたるには、かならずカードやキーがなければ通れないシステムとなっている。洗濯室で洗い物をするにも、わざわざカギのかかったドアをあけて使うのである。寮費などの支払いその他を扱う事務室も、勤務時間中にもかかわらず内側からカギがかかっていて、ノックをして開けてもらわなければならない。これ程厳重であっても、やはり盗難や事故があつて、私自身も痛い目にあつてしまった。やはり、日本人ほど日頃からぼんやりして間の抜けた人種はいないのかと、しばらくは自己嫌悪と恐怖心にさいなまれる思いであつた。警戒心、自己管理、自己防衛は、常に身につけていなければならない資質であることを身をもって、学ばされたのである。

シェフィールドに滞在する数年前には、マンチェスターに滞在したことがある。イギリスは、いわずと知れた産業革命の発祥の地。いたるところに、その面影を忍ぶ遺跡や資料が存在している。わたしにとって印象深いのは、なかでもマンチェスターやバーミンガム周辺の、かつての産業革命のメッカとも言うべき地方。マンチェスターには、さまざまに人情の機微にも触れて、忘れ難い思い出がいくつもある。元マンチェスター大学のC. ラッセル先生ご夫妻には、個人的にも大変お世話になっている。先生宅にホームステイしながら、マンチェスター大学の図書館に日参したこと、上品な奥さんとの世間話に時のたつのも忘れて夜半まで話し込んだりしたことが懐かしい。またその後、一家を挙げてイングラン南部の有名な保養地ブライトンに引越しをされて後も、家内を伴っておじゃまさせていただいている。

マンチェスターには有名な科学産業博物館 (The Museum of Science and Industry) がある。産業革命の当時さながらにさまざまな紡績機や紡織機、蒸気機関やクラシックな自動車などの展示がところせましとならんでおり、当時の面影をそのままに伝えている。実際に動いているものもあり、また蒸気機関車や現代科学の紹介など、青少年の科学教育にも役立つようになっていて、大変興味を引かれた場所のひとつである。ここの博物館では、ひとつの失敗談がある。初めて訪れたときのこと、あれこれと興味深さに熱中のあまり、時のたつのを忘れてうろうろしているうちに閉館の時間になっていたらしい。あとで思い出してみると、たしかになんとなく周囲が静かになっていたような気がするが、その

時はまったくとっさのことであった。入り口の方でなにか大声でどなるような声が聞こえ、そして錠前の閉まるような金属的な音に、ハットと我にかえらされたのである。職員も、閉館時間とともにいっせいに引き上げてしまう。完全に閉じ込められてしまったのだ。一瞬血の気が引いた。あわてて玄関に駆けつけてはみたものの、もうだれもいないしドアもびくともしない。ここで徹夜か、先生宅にどうやって連絡をとったものか、途方にくれるばかりの狼狽ぶりである。あちこち手当たり次第にドアを押したり、引いたり。とある非常用ドアのバーを持ち上げると、軽く動いたのである。やった！ほんとうに天にも昇る思いで、外に飛び出した。後でこのことを奥さんに話したら、行き先をちゃんと告げて行くように、もし帰ってこなければ警察に電話してあげるから、と。

市内中心部にあるエクステンジ・シアターは、元の株式取引所を改造した当時のままの面影を保ち続けている劇場である。天井の部分を見上げると、初期の株式標示板がそのまま掲げてある。かつてのイギリス資本主義の中心地で、当時株式取引がどのようにして取り仕切られていたのかと感慨ひとしお、興味は尽きない。

大学側の学生や留学生の受け入れは、私が個人的に体験した限りでは、イギリスではかなり組織的に整備されていると感じた。もちろん、それが十分満足すべき水準にあるかどうかは、個々の判断によるところ大であろう。語学の研修、宿舎の手配、図書の利用許可など、日本の状況と比較して、はるかに学生の要求にマッチするシステムとなっており、最少限の身の回りのものを持ち込むだけで、その日からの生活ができる。ベッドや最低限の家具、シャワーなど一通りの条件が整っている。限られた期間だけ滞在する留学生にとって、寝具や机など個別に調達しなければならないとなると、事情も全く不案内なところではなみたいいの苦労ではない。割安の料金で、すぐその日から生活の場がこうして確保できることが、留学生にとってはいかにありがたいことか。

大学は、伝統があり著名な教授陣のいる大学ほど高い評価を受けているのは、もちろんである。だが、実際にお世話になってみたたちばからいえば、それにもまして優れた図書館、豊富な図書や資料そしてコピーがいつでも利用しやすく整備されていて、そこですぐれたスタッフに適宜対応してもらえることほど、ありがたいことはない。大学のよしあしは、図書館の善し悪しにも大きく依存してくるというのは、一面の真理ではないかと思う。

イギリスのテレコムといえば、もちろんブティシュ・テレコム（BT）である。またこれに、マーキュリー（Mercury）が続く。だが、ハル市（Hull）には、知る人ぞ知れつきとしたイギリス第3のPTO（公衆電気通信事業者）キングストン・コミュニケーションズ（Kingston Communications、元ハル電話事業公社）がある。それは、同市所有の特異な自治体営電話会社で、その歴史はほぼ1世紀にもおよぶ。しかし、テレコム関係の専門研究者のあいだでも、この会社については名前程度しかあまり知られていないというのが実情である。私は、何度かこの町や会社を訪れて、貴重な資料や聞き取りを行い、そ

の歴史や現状、将来に大きな興味を抱いている。また、土地の中央図書館やアルカイーブを訪ねたときの、かすかすの驚きや出会いの思い出がある。このアルカイーブの職員ともある程度顔なじみとなったが、専門的な職業意識とてきぱきとした対応ぶりが印象に残っている。まずインターホーンで名前と用件を伝えて、遠隔装置でドアのロックを解除してもらわないと入れない。資料のコピーなどでできれば当方で適当にやらせて欲しいと申し出ても、必ず先方でやったものを渡してくれる。また、昼休みの時間、あるいは終業時刻などは厳格で、たとえば昼休みの時間は必ず全員館外に退去し、時間までは中に入れてもらえない。

先述のラッセル先生夫妻にはとくにお世話になりっぱなしであるが、本当に人間的な付き合いをさせていただいている。夏休みを利用してのホームステイ中のわたしを残して、何週間もご夫妻が家を空けるといふ。その間お世話になっている私に留守を任せるからと、近所の人をわざわざ招いてティー・パーティを催し、顔合わせをしていただいた。とにかく、清閑な住宅街のセミデタッチド・ハウスの一角で比較的安全な地区のようであったにもかかわらず、空き巣や押し込みもあるとかで、戸締まりは厳重、二重三重に施錠し窓には防犯用感知器が装備してある。昼間でもかならず施錠し、むやみに他人が屋敷内に入ることを頑強に拒絶しているかのようである。何日か留守をするときには、夜半室内には自動的に点灯する照明装置をセットする。イギリスというわれわれから見れば比較的治安状態のよい紳士淑女の暮らす典型的なマナーの国と思われている国のいわば一地方都市マンチェスター、その郊外の清閑な住宅地でも、防犯については大変厳しい警戒心が満ち満ちているという実感。そうした状況下で、いくら親しくはさせていただいているとはいえ、異邦人の私にまったく留守を託すなどということは、並たいていのことではない。むしろ、託された私の方が驚くと同時にその信頼関係に痛く感激させられたことはいうまでもない。

ところが、ここでもまた大失敗をやらしたのである。3週間ばかりのご夫妻の夏のフランス旅行も最終日、今日はいよいよ帰国というその日、午前中にいつもより少しばかり念入りに掃除などをしてゴミを外の容器（ゴミ容器は、「ビン」と呼ばれており、定期的に「ピンマン」が回収にくる）に捨てに行ったときのこと。いつも気をつけているはずの玄関のドアの鍵、これが自動ロック式、ゴミを出しに一步踏み出したとたん「バタン」。しまった、もうどうにもならない。うっかり締め出しをくった格好である。ふだん着のまま、キーはもちろん財布もパスポートもみな家の中。さあ、どうしよう？夕方の予定時刻までまだまだ時間はたっぷり。町に出て、ぶらぶらしてみても気持ちはいっこうに紛れない。近くの公園で芝生にころがって周囲をながっていると、いたるところに犬の落とし物や毛が散らかっているのばかりがいやに目につく。もし予定通りご夫妻が帰って来なかったら、どうしようか？近くのホテルにでも、事情を話し泊めてもらわなければならないのか？あれこれと悲観して心配すればきりが無い。異国でまったく独りぼっち、他に誰とていま

頼りとすべき親しい知人や友人がない。だんだんと日も傾き、おなかも空くし心細いことこのうえない。旅行中の孤独感、侘しさをこの時ほど味わったことは、あまり記憶にない体験である。日暮れ前、ご夫妻を乗せたタクシーが滑るようにして、無事予定通り姿をみせたときには、本当に地獄に仏の心境であった。

休暇の過ごし方、仕事に対する考え方など、文化の違いを感じる事が少なくない。かって、わたし自身休暇を過ごす目的でスコットランドはグラスゴー市の西外れにあるドヌーン (Dunoon) に数日間滞在したことがある。当初バスによるいわゆる団体ツアーのようなものを希望して、大学のユニオンで探したのであるが、あいにくとこれといった面白そうなものはみな満杯であった。やむをえず残りものに不承不承参加したというのが、そもそもの発端であった。10日ばかりの休暇で、ドヌーンのホテルに滞在する一団はこれといった観光やイベントが初めから予定されているわけでもない。時折、近くの湖水や町にバスで一緒に出掛けたり、クルージングに出掛けてカモメにえさを投げてやったりする程度である。さぞ、退屈でつまらないツアーだろうと最初からいささか気落ちしての参加であった。だが、これが以外やいがい、結構楽しい充実した休暇となったのである。日本人は私以外だれもいなかったが、結構いろいろな人と親しく交流でき、本当の意味での英国風休暇を過ごしたという実感をえた。たまたまその直前まで、ロンドン市内の当時のソ連大使館で、その年の夏にレニングラードで開催予定の国際財政学会への参加のためのビザの取得に気をもんでいたのだが、なかなかこちらの思うように埒があかず、いささか精神的にも参っていたときだった。そのせいもあり、こうした休養が実にありがたかった。しかし、結局はちょうど例のゴルバチョフ幽閉という歴史的政変のときで、結局、学会はキャンセル、ロンドンから急遽帰国を余儀なくされてしまったのではあったが。

それにしても、日がな一日とくになにをするでもなく、ホテルやファームハウスでゆっくり家族や夫婦で休暇を過ごすという習慣は、日本人などはめったにお目にかかることではない。ほんの数人しか泊まれない、片田舎のファームハウスなどで、酪農に従事している中年の夫婦づれなどに何度か巡りあわせた。1週間とか10日間とかそこにじっと留まって、ゆっくりしているとかというのが大半であった。そうした休暇の間は、知り合いや兄弟などに牛の世話などを交替で頼んできたなどと話しているのである。恐らく行楽地や人込みの中を一カ所でも多く速く歩き回ってこそ、休暇や旅行の現実的過ごし方であるといつるまにか慣習化してしまっているわれわれ日本人。一カ所にじっくりとどまってるんびり過ごすなどということは、われわれにはなかなかなじめない。ところが、かの地ではこせこせと忙しい駆け足のような旅行の仕方など、休暇とはみなされていないようにも思われる。わずか一晩や二晩泊まりで、すぐに立ち去ってしまうわれわれ日本人客をみて、ファームハウスやマナーハウスのオーナーたちは、むしろ不思議そうな顔をむけているようにもみえた。

こうした旅でたまたまであったひとびとの多くが、まったく普通の人々であり、定年になって余生を送っている炭坑労働者やパートタイムのスーパーのおばさん、ゴミ収集のおじさんであったり、乳牛飼育の農夫であったりした。特別な人で、金や暇が十分あって休暇を取っているというよりも、幸せを味わいまた楽しく働いて人生を送ることの当然の構成部分として、一年の一定部分は休暇に当てている。豊かな人はゆたかなように、そうでない人もそれなりにと、レジャーを楽しみ人生をエンジョイしている。何か忙しい落ち着きのないわれわれ日本人には欠けてしまっている、ひとびとのゆとりや自信のようなものがそこには感じられたのである。

バスやタクシー、地下鉄や列車は、どこの国でも公衆の交通機関として欠かせない。こうした公共の機関は、日本などと比較してやはり割安であると思う。もっとも、あまり近寄りたくないような薄汚れた感じのバスや列車も平気で走っている。世界で最も古い歴史を誇っている国だけに、鉄道ネットワークも縦横無尽に広がっているし、コーチ・バスという郊外バスも安くて便利である。一方、多くの道路は馬車道としての名残のせいか一般に狭いし、駐車の仕事も住宅街などかなり乱雑となっていて、他人の家の前でも平気で駐車する。シェフィールドにいたときのわれわれの借家の前のケースもそれ。坂道になっている棟割り長屋のようにつらなつらな同じような外観をした住宅の一角にあったが、その玄関先に当たる道路に、ときどき見たこともない車が駐車していた。しかたなくわれわれもそこからかなりはなれた他人様の家の前に、同じように無断で駐車したこともたびたびあった。家主さんの弁によれば、公道での駐車は早い者勝ちだとか。そのことで、なにか特別のトラブルもあったようにも思わなかった。逆向き駐車も平気であり、おんぼろ車も結構走っていたが、車の犯罪や交通事故もしばしばニュースとなっていた。

大学のキャンパス内に昼間に駐車していた車の窓が壊されて、中からバッグなどが盗まれたりするということがまれではないとか。ハル大学のある先生の車に同乗させていただいたときに、その先生ご自身そうした被害に遭遇されたことがあったとか。車の中にバッグなどの物を放置しないこと、ハンドルに長い棒状のものを取り付けるとか、クラッチの操作が出来ないようにする固定装置をセットするなど、車自体の盗難や金品の強奪を防止するための措置を講じた駐車中の車は、方々で見かけた。日本では、幸いまだそこまでは至っていないようであるが、日頃からの警戒心は怠らないようにとの教訓とみえた。

車社会では、駐車問題はどこでも深刻。公道に、時間帯とか、一方通行制とか一定の決まりを設けて、そこに駐車する制度が柔軟にとられている。これで、いくらかは駐車問題が緩和されているのでは、と思ったことである。だが、駐車問題でも苦い経験がある。ヨーク市 (York) でのこと、レンタカーで家族連れのドライブに出掛けたときのことである。ヨーク大学への立ち寄り、鉄道博物館や古城壁の見学などが主な目的であった。駅近くの駐車場の案内板に沿って進むと、川沿いに出た。ちょうど、スペースがありラッキーとそ

ここに駐車して、そのまま小一時間ほど近辺をうろうろ。車に帰ってみて、びっくり仰天。なんと、駐車違反の罰金の警告ラベルが、張り付けられていたではないか。あわてて、付近の年配の品の良さそうな紳士にその事情を尋ねて、事情が判明。近くに駐車料金の自動支払機があり、そこで所要の料金を支払いその領収書をウインドウの良く見えるところに添付しておくシステムであった。なのに、それにまったく気付かずにそのまま立ち去ったためであった。結構しっかりとした授業料を支払うはめにはなったが、これも異文化との出会いと思えば貴重な体験。それ以降は、駐車のために、まず料金支払機の存在を確認することを忘れることはなくなった。

駐車問題で感心したのは、マン島 (Isle of Man) での経験。マン島は、アイルランドとの間に挟まれたアイリッシュ海に浮かぶ小さな島で、イギリスの自治領のひとつ。独自の議会や法律があり、マン島独自の通貨も流通している。ダグラス (Douglas) がその首都、島中が世界的なオートレースのコース (TT Circuit) として知られている。コースをドライブしてみると、カーブなどには、あらかじめストロー・バッグ様のもので激突時の緩衝施設が施してある。ところどころに、車やオートバイの博物館があり、いくばくかの料金で見学させてもらえるようになっている。たしかスナーエフェル (Snaefell) の山岳鉄道の頂きのあたりの博物館であったと記憶しているが、ホンダのレーシング用オートバイとともに故本田宗一郎氏の写真が大きく掲げてあった。この島の中心地ダグラスでは、縦横それぞれ10センチ余りの独自の駐車カードが使用されている。厚紙でできた回転板を操作して、カード中央の切り取られた窓口から午前と午後の時刻が表示できる仕組みで、到着時間をセットして車のフロントにおいて置けば、所定の位置では決められた時間内の駐車が無料でできる。レンタカーにも、このカードが備え付けてあり、便利である。

タクシーも、チップを払う習慣のないわれわれにはいささか緊張させられる場面もあるが、料金は割安であるように思われた。最近では例の箱型の黒塗りのものばかりではない。ある朝電話で呼んだとき、一見まったくマイカーと見間違えるようなものがやってきてそこで待っているのに、いらいら時間を気にしながらいつまでも待ちぼうけ。しびれをきらして再度確認の電話を入れて始めて気付いたり。流しのタクシーに手を挙げ、さっと前に止まったまではよかった。さあ、乗り込もうといくらまってもドアが開かない。ドライバーはしきりに手を仰ぐようにしてなにか合図を送っている。なのに、ドアは開けてくれない。後の車がいらいらして、速く行けと催促。ついに、ドライバーはあきらめて走り去ってしまった。ああ！残念。せっかく見つけてやっと乗れそうだったのに……。日本では、タクシーは止まればさっとドアが自動的に開くのが普通。これがイギリスでは、通用しなかっただけ。きっとドライバーは、変な外人といらいらしたことであろう。列車のドアも時々これで失敗する。いくら待っても、開かないばあいがある。時には、わざわざ窓を開けて、外側に手を伸べてノブを回さなければ、内側からは開けられないものもあるのだ。

下手をすれば、うっかり降りそこないそうになることもあるからご用心。

またレンタカーも日本の感覚からいえば、割安のように思われる。現金よりもクレジットカードを利用すれば何かと好都合、比較的手軽にドライブが楽しめる。レンタカーでも、また失敗談がある。あるとき、シェフィールドの借家の近所のレンタカーを借りて家族で出かけたときのこと、確かに燃料計の針は一方にほぼ完全に振れており、満タンになっているものとばかり信じ込んで、いそいそとドライブにでかけたまではよかった。われわれの感覚からいえば、レンタカーは借りるときには、いつもガソリンは満タンになっているのが常識。そう信じ込んで疑うことなどついぞ思いもしなかったのだが、所変われば品変わるで、かならずしもそうでないケースがあった。そういえば、たしかにキーを渡されたときに、燃料計のところを指してなにか言っていたことが、それが燃料は自分で必要なだけ注いで走り、返すときはカラにしてと言うことであつたのかなと後になって気付くというおそまつさ。当然ガス欠になつて、大慌て、レスキュー隊を呼ぶやらで大恥をかくという、まさに悲喜劇を自ら同時に演じてしまった。

車道が、日本と同じ左側通行なので、われわれ日本人にはありがたい。ラウンド・アバウト (roundabout) と呼ばれる交差点などの中央の回転道路の走り方に慣れてしまえば、運転は日本よりはかえって楽である。ガソリンも安くセルフサービスシステム、必要な量だけ自分で注入して店のカウンターで支払うだけ。高速道路も無料、道路網も発達しており、時間があればドライブも結構楽しい。ただ、週末とか祭日など、ラッシュ時の渋滞もあるのはいずれも同じ。

散髪は、日本ほど親切丁寧な扱いをしてもらえるところは、知らない。例えば、イギリスのばあい。カッティング、ひげそり、洗髪などのサービスがそれぞれバラで売られている。もっとも簡単なカットのみのばあい、ドライのコース。バリカンでざっと散髪、ドライヤーで首回りに落ちた髪の毛を吹き飛ばし、スプレーを吹きかけるだけ。まさに、速いの、安い、荒っぽいので、いやはやなんとも。

キュー(queue)とは、行列のことである。タクシーはもちろん、バス、銀行、郵便局、駅の切符売り場、食堂いたるところでごく自然にこれができる。旅行者のごったがえすインフォメーション・センターで、市内案内のパンフレットをもらうだけだからと横から手を出して、若い女性の職員から厳しく注意されたこともある。郵便局や駅の切符売り場では行列の先頭の人から、合図のあつた空いた窓口へと順番に移動して対面する。また、前の人の用事が済むまでは泰然自若、いつまでも辛抱強く待つゆとり (のようにも見うけられた)。どんなに長い行列が続いていても、自分の納得の行くまで用事が済まないあいだは、いつまでも平気で頑張っているひと、まるでそうするのは当然の権利とでもいうように。ドアは、後から人が続いてきていれば、必ず手を添えてその人のために支えてあげる。後ろの人のことに気づかず無意識に通り返り、ドアがその人の前でバタンと閉まっ

たすることの決してないように、ご用心。

たべものは日常的慣習的なものであり、海外にでてまず当惑するのがこれであるといってもよいであろう。それぞれの国や民族で食文化の伝統や特色があり、これに触れてこそ旅行の醍醐味ともいえる。だが、これにうまく適応できるかどうかは保障の限りではない。いや、しばしば重大なトラブルや悩みの大本にもなりかねない。また、われわれ日本の食習慣からいえば、醤油味の恋しさ、塩加減の相違からくる物足りなさは、実際に体験してみればじめてその重大さを痛感する。とにかく、ものを食べて空腹も十分に満たされたとしても、それで満足感がえられるとは限らない。なにか、食いたりなさ、物足りなさが払拭されない。そこで、いくら高くてもやはり、うどんや寿司等が食べてみたくなる。日本料理店で日本食が食べたくなるのは、こうした潜在的欲求のなせるわざということであろうか。これが満たされない状況がしばらくつづき、現地の食習慣にもなじめない状態が長引けば、このことだけからでもホームシックが高じる可能性がある。食文化のもつ恐ろしいまでの慣習性、民族性とでもいうべきか。イギリスでの食事はわれわれ日本人にはなかなか馴染めない。そのヴォリュームの多いさにも圧倒される。大皿一杯の油で揚げたポテトチップスとフィッシュ、脂っこさとヴォリュームだけで食欲が減退してしまうような体験もしばしば。やはり、食べ物は長い習慣でなかなか一朝一旦で変えることは難しい。日本への留学生のうちには、日本食に馴染めず、自分で食事を用意しているという話を時々きいていたが、その気持ちが今は良く分かるような気がする。

どんな小さな町にも郷土史や自然資料館のようなものが一つや二つはある。それぞれ土地の人々の誇りの一つとなっているようである。そこでは、ヴォランティアが献身的に活躍しているのを目撃する。記念品や資料などの販売や寄付などで細々とでも、継続しているようであった。地域の文化としても貴重な役割を果たしている。シェフィールドの借家の近所にあった博物館は、週末や特別の日だけしか開館せず、完全に地域のヴォランティアで維持されているようであったが、熱心な協力者たちが無心に働いていた。文化の伝統や根強さを感じさせる一例である。商店街には、オックスファーム (OXFARM) という古着屋がよく目に付く。この売上が、福祉関係への貴重な財源のひとつともなっているようで、いろいろなものが地域の住民から持ち込まれている。冷やかし半分のにぞいてみると、相当古くした年代のもののようなものも堂々と並んでいる。また、一般に地方の商店街では、間口も狭く品数も限られた小さな店がよく目に付く。閉店時間も早く、これで経営がなりたつのであろうかと、他人事ながらちよっと心配になるほど小さなものも目に付く。新聞販売や日用品文具などを販売している近所の老夫婦とは、顔なじみになった。こうした人々との触れ合いがおおいに心の支えともなるように感じるがあった。こうした人々も当然のように何日かは、ヴァカンスに出かけて、その間嫁ぎ先から里帰りした娘さんなどが店番をしていた。地域の流通を支える仕組みや消費者との触れ合いの在り方など、それぞれ

れに固有の文化が伺えて興味深い側面もかいま見た気がする。

留学や旅行中には、異文化とどのように接しそれに対応するか、そうした中で新たな出会い、喜びと驚き、不安、さまざまな緊張やストレスを重ねながら、生活していかなければならない。落ち込んだときに優しく差しのべらる援助や励ましのことば、思いやりの心など、当人にとっては計り知れないほどの大きな力となることがある。個々の留学生がおかれている状態は、まさに千差万別である。また同じ人物であっても、その時の具体的状況や精神状態によって全く違った受け取り方がなされることもしばしばありうるものが、体験的にもいえると思う。これらの経験は、私自身の身近に存在する留学生に接するばかりにも、大変参考になることが少なくない。また、留学生の希望や必要にたいして、微力ではあるが、出来る範囲内でいくらかでも力になりたいと願う。

B. 異文化との出会いー海外からの若者

広島大学の留学生は近年急速に増加している。こうした大学の国際化は、良きにつけ悪しきにつけ、今後ますます進んでいくことであろう。私自身も、直接間接こうした留学生との接触到に幾度か恵まれている。これまで私自身がアカデミック・アドヴァイザーとして直接的に関与してきたのは、タイ、インドネシア、アメリカ合衆国、中華人民共和国、韓国などからきた7人の若者たちである。アルニー・インタラパイロットさん、アニー・セティアニさん、欧 暁紅さん、シェーン・ブライアン君、張 煒麗さん、栄 躍君、趙明鎬氏である。アルニーさん、アニーさん、趙明鎬氏の3名は現職教員研修留学生としてそれぞれ1年半ほどの間、シェーン・ブライアン君は日本語・日本文化の留学生として1年間、欧さん、張さん、栄君の中国からの面々は私費の研究生や大学院生としてそれぞれ3～5年間にわたって（それぞれの時期と研究テーマは末尾に掲載）。

アルニー・インタラパイロットさんは、私の受け入れた最初の留学生で、タイはチェンマイ市にあるラジャマンカーラ・インスティテュート・オブ・テクノロジーの先生であった。とても気立ての優しい、気のおつく女性で職業教育に関する日本とタイとの比較研究ですぐれた研究成果をあげられた。日本語や日本文化に対する高い関心を示し、貪欲ともいべき積極的な探求心の持ち主であったが、半面常に研究室の清掃など細かい心配りにも怠りなく、教官仲間、院生や卒論生たちゼミナリス滕とも大変仲良くしていただいた。この先生が日本で留学中にいろいろと体験し学ばれたことは恐らく計り知れないほどの事に及んだであろう。だが、アルニーさんを通じて、私自身が学んだことも、また実に多い。いままで全くといってよいほど関心も知識もなかったタイという国が大変身近な存在となり、ニュース報道などにタイのことが登場しても注意してみるようになった。タイの歴史や地理は言うに及ばず、さまざまな食べ物、文化や考え方、日本との関係など、挙げればきりが無い。

タイの女性は、同性同志といえども人前では決して裸になる習慣はないということで、ゼミナリステンとの合宿で一緒に温泉に入った女性同士の間でもそうだったと、ある女子学生の談。また、ビールを飲まないとか、ものを食べるときに容器などを手に持たずテーブルに置いたままで食べるとか。日本の慣習からいえば、こうした仕草は時に女性のばあい横着にも映ることもなくはないが、お国柄の違いかと後で気付いたことである。やはり、面と向かって当人にそのことを口やかましく注意したりしなくてよかったと胸をなでおろしたことである。したがって、日本の学生が男女を問わずビールやお酒を飲んで騒いだり、食器を持ち上げて食事をしていたりすることが、恐らく留学生の目には奇異に映っているばあいもなくはないであろう。こんな日常的なことからも、異文化間の相互理解と相互の寛容さが、国際化の中でますます求められてくるのであろう。

アニー・セティアニさんは、インドネシアの教育関係の役人で、恐らく日本の教育委員会の指導主事あたりに匹敵する立場の人と類推される女性。フィリッピンのアキノ大統領によく似た風貌のキュートな笑顔のひと。ビジネス・エデュケーション関係の教育指導の元締めの仕事を担当しておられ、子どもさんやご主人を国に残しての単身赴任と聞いている。日本語については、かなりのご苦労があったらしく、ほとんどコミュニケーションは英語であった。アルニーさんとアニーさんは、名前はわずか一字違いであったが、その人柄や周囲に与える雰囲気は全く別であった。趙明鎬氏は、韓国釜山市の中学校教諭で同じく教員研修留学生、会計や簿記の専門とのことであるが、日韓商業教育の比較研究がテーマであった。

シェーン君は、すでに日本での何年かの生活経験があり、日本語もかなり進んでいたユタ大学の学生であった。本人は、1年間の日本での留学で、先方の大学の単位も充足するつもりであったようであるが、広大とユタ大学間ではまだ協定がなく、当てが外れたようすであった。実際に、日本に来てからこの事を知ったかたちとなったので、随分と気落ちした様子も見え、私自身なにもそのことで手助けすることもできず、はがゆい思いであった。せっかくの政府奨学金による留学生であってもこうした情報の行き違い等があると、効果は半減してしまう。留学生本人ももちろん、お世話を引き受ける側としてもどうしてあげればよいのか当惑してしまう。国際理解や情報伝達の難しさを実感させられたひとつの例である。

欧さん、張さんおよび柴君は、いずれも中華人民共和国からの私費の留学生である。当初、研究生として在籍し、1～2年後には大学院生として研究を継続、さらにまた研究生として在籍した経験の持ち主。それぞれ日本の中小企業論、流通小売業とくにコンビニエンス・ストア論、日米半導体論などの研究で、その研究成果をまとめている。全く言葉も分からない段階で来日、瞬く間に日本語を吸収し、日常的な会話はもちろん文章も細かい文法や言い回しはともかくも、だいたい間に合うようになって行く。われわれ日本人の外

国語学習のスタンスや習得の進み具合からいえば、目を見張るほどの上達振りである。たとえば、つい最近とどいた栄君からの便り「明けましておめでとうございます。折に触れては、お教えいただいたことを思い起こし、心を新たにしております。今、チェコのPRAHAに住んでいます。・・・」日本語としても、ほぼ完璧の域に達しており、良くがんばったものと感心させられる。

彼らと日本語の指導を含めていろいろと交流を続けることによって、日本語や日本事情についても、われわの方が逆に教わることもけっして少なくない。日本語そのものについても、われわれが日常的に無意識に使っていて、なぜそうかという説明の仕切れないことにしばしば出くわす。例えば、「私が広島に来た前に、上海で日本語勉強した。」などとよく耳にする。確かに、広島に来たことはすでに過ぎ去った過去のことであり、過去表現の方が論理的である。また、上海で日本語を勉強したことは、さらに前のことになるので、当然過去の方がよい。この言い方が、全体では、日本語の表現としてはなぜかちよっと不自然に響くと気になり始めると、説得的に説明する必要に迫られる。だが、それがわれわれ素人には、できそうでなかなかできない焦燥感に駆られる。「私は、広島に来る前に、上海で日本語を勉強した。」この違いは、恐らく、英語の文法で苦勞させられる時制（テンス）と動作・作用の段階性を示す相（アスペクト）との違いの問題であると思うようになったのは、留学生とのお付き合いのおかげである。本当のところは私もまだよく分かってはいないのだが、時制を意識して言えば、過去は過去で表現すべきであるが、時制を捨象して動作や作用の段階性を意識して言えば、「広島に来た前に」ではなく「来るまえに」の方が自然に響く。同じような難問は、「私は」と「私が」、「広島に」「広島には」「広島では」などの、ごくわれわれが日常的に頻繁に使う助詞や表現方法の微妙なニュアンスの違いについても無数にある。日常的な留学生との接触に当たって、これらの問題の指導の際にも、素人でも簡単に説明し納得してもらえる何か簡単な日本語マニュアルのようなものでもあったらと思うのだが。ご専門のたちばからのアドバイスでもいただければありがたい。

それぞれに、自国の文化や民族性を体現した存在であると同時に、また極めて特徴的な個性の持ち主であるこうした異国のひとびととの出会いは、また、受け入れ側の者にとっても別の意味で異文化との極めて強力な接点となる。いままで名前程度しか知らなかった全く知識も関心も乏しかった国々の文化やそこに暮らすひとびととに対する関心は、いやがうえにもかきたてられる。そのインパクトは、受け入れ側の我々にとっても、恐らく当の留学生本人のそれにも劣らないほどといえよう。

だが一方で、帰国後全く音信が途絶え、交流のあった学生やお世話になった教官の間でも話題にのぼることもあまりないひともある。何かこちらの側の対応の仕方にまずいいこでもあったのかと、ときには反省もしてみるのだが。家具や生活用品など留学生のさしあ

たつての生活に必要なさまざまな必需品など、身を惜しまずに面倒をみ続けているある友人の話。彼とても、いろいろと親切にしてあげたつもりでも、まったく挨拶状の類いも届かないばあいも少なくないというから、こうした事例もあるいは特異なケースとばかりはいえないということかもしれない。

C. 異文化との出会い—むすびにかえて

留学生の受け入れや学術指導の前提条件、いわばバウンダリー・コンディションのようなことについても若干言及しておきたい。かつての時代のように、留学といえば海外への一方的な流出のみというのではなく、双方向的な若者の交流が頻繁となることが望ましいことはいうまでもない。その実現のためには、またさまざまな条件の整備が欠かせない。しだいにそうした認識も社会的に定着し、ある程度の前進が見られるようになっていくことはよろこばしいことではある。だが、いざ現実に留学生を受け入れてみるとさまざまな問題に直面する。

まず、宿舎の問題。ある国費留学生を受け入れたときのこと、本人到着の日時の連絡が届きその日に駅まで出迎えに。はじめての対面ではあつたが、難無く当人に巡り会えた。さて、ではということと宿舎まで案内をと切り出して驚いた。まだなにも聞いていないし決まっていないとのこと。大きな荷物を引きずり、疲れ切った体でやっと目的地に到着したばかり、これからどこかに宿舎探しとはどうしても「ドロナワ」に過ぎる。最低限必要なアコモデーションの手配の段取りについてだけでも、せめて事前の確実な連絡が欲しい。本人に言わせれば、現地に着けば迎えの者が待っているとだけしか、聞いていなかったようす。やむをえず、むさ苦しいわが家の空き室、子供部屋でとりあえず我慢してもらいまつ。初対面でもたもたしたり十分に意志も通じないと、いかにも不安な印象を与えてしまう。

経済的負担の問題も、なかなか微妙である。まずは、下宿やアパート探しからということになるが、土地の慣習によっては多額の敷金がまず必要となる。ところが、そのような情報は本人には初耳とのことで、もちろんそのための備えなども持ち合わせてはいない。それならと、急遽当方の預金を引き出して、これに間に合わせなければならない。また、これと同時に、保証人の問題がある。なにごともなく事柄が推移して予定の期限が完了すれば、単に名前だけを貸せることに過ぎない。だが、現実になにかトラブルでも発生してくると、精神的にも物理的にも、大変な負担に耐えなければならないと思うとつい二の足を踏むことにもなりかねない。こうしたばあい、受け入れの側の個人や家庭に現実にさまざまなかたちで負担が一挙にのしかかってくるようなことが常態となってしまうことだけは、避けたい。

留学生の支援や受け入れにできるだけ積極的に対応したいという気持ちが一方ではあり

ながらも、他方ではどこかに一抹の不安や心労の影に奮える気持ちも頭を持ち上げてくる。これらのさまざまな諸問題に対して、できればもっと組織的な対策の確立が望まれる。この点でイギリスでの個人的な体験からみても、まだまだ不十分さがいなめない。留学生の受け入れや生活条件の組織的援助の体制、設備のいっそうの拡充に特段の行政的・組織的な施策の充実が望まれる。

また、近年急増の傾向にある中国などからの私費留学生にも典型的にみられるように、生活費を極力切り詰め、限られた条件下でのアルバイトなどで留學生活を続けようと懸命に頑張っているものも少なくない。そうした留学生にも、規程上、入学金や研究料、授業料などかなりの額にのぼる費用の支払いが義務づけられている。せめて、一度研究生なり院生なりで同一大学に籍をおいた者に対しては、入学金などの再度の支払いだけでも免除できるような措置は、早急に講じられないものであろうか。支払いが滞りがちで、事務方からの督促の情報などをどうしても伝えなければならないことも時にはある。苦しい生活条件などがそれとなく感じられるときには、どのようにして本人に伝えるべきかと気の重くなることもある。

1) イギリスの民営化並びにテレコムに関連した主な研究業績：

電気通信事業における規制緩和－O F T E Lの組織的位置『広島大学大学院学校教育研究科創設十周年記念論文集』、1992.3.

(翻訳) D. マーシュ、サッチャーの民営化政策－文献レビュー 公益事業学会『公益事業研究』、第44巻第3号、1993.3.

公益事業の競争と規制－イギリスにおける電気通信事業論によせて『経済理論学会年報』第3集、1994.10.

複合教材としてのテレコム－英国B Tの事例研究 広島大学学校教育学部付属教育実践指導センター『学校教育実践研究』第1巻、1995.3.

Kingston Communications (Hull) の歴史－英国における地方営電話事業の生成 公益事業学会『公益事業研究』、第48巻第2号、1995.10.

イギリスにおける民営化と電気通信事業－とくに規制緩和と競争『電気通信普及財団調査研究助成報告書』No10、1996.2.

英国における電信事業の生成『広島大学学校教育学部紀要』第II部第19巻、1997.1.

2) 留学生の研究テーマ：

Arune Intrapairot, Business Education in Japan, 1991.

Ani Setiani Djoesar, Marketing System and Business Education in Japan, 1992.

趙 明鎬、比較商業教育論－日本と韓国を中心に、1996.

Bryan Shane Lindsay, Japanese Business, 1993.

欧 暁紅、市場経済と計画経済の比較、1993.

日本経済の国際化と中小企業、1995 (修士論文)

張 煒麗、日本近代経済史の研究、1993.

日本におけるコンビニエンス・ストアの経営システム —セブン-イレブン
を中心に、1995 (修士論文)

日本におけるコンビニエンス・ストアの経営比較、1997.

栄 躍、日本の市場経済と計画経済、1993.

日米経済政策の研究—とくに半導体を中心に、1996 (修士論文)

半導体産業論、1966.